

「一」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

校長の簡単なしょうかいが済んで、当の新任柔道師範河田三段があいさつのために壇へ登った時、その講堂の中にうやうやしく並いた生徒達の眼はみな好奇心にかがやいていた。たいていの眼はいたずら者らしい光を帯びていた。

問四A

そしていよいよ河田師範の顔がそれらの眼の矢面に立ったしゅん間、生徒達はみな急にうれしくなった。後の方にすわっているものの中には、わざわざこしをのばしてながめたものもあった。そしてその眼は同じくうれしそうになって生徒達の頭の中へまた割りこんで行った。

河田師範の顔が見られたのは、本当をいえばそれが最初ではなかった。校長に導かれて、羽織はかまで着席した時にも、またその朝体操の先生達のいる部屋の中で豪傑笑いをしているときにも、河田師範は生徒の視線に六尺近くの巨軀をさらしていたのではあったが、いよいよ公然と生徒の前に現れる段になった時、彼らは用意をしていたようにうれしそうな眼付きをしたのである。

生徒達は腹からうれしさがこみ上げて来るのを感じて、「ううううう」とのどをつまらせた。それは何か非常にうまいあだ名か警句がだれかから出されるのを待っているのであった。それはごくわずかなものでよかった、ほんの少しの火花のようなもの、それで結構であった。とにかく生徒達は彼らの笑いを爆発させたかったのであった。その笑いといっても——笑わずにはいられないというよりも、むしろ笑わねばならない、全部で笑わねばならないという意識から生じて来たものなのであるが——

津田三吉もその中の一人であった。彼はその中学の最上級生の五年級の中の一人であった。

——三吉が河田師範の顔を見た時、彼も急にうれしさがこみ上げて来た。そして講堂にみなぎっている、何かをきっかけに爆発したいという生徒達の意識を感じると彼は一種の圧ばくめいたものを感じた。「ここでも何かい

わなければ……。」そんな欲望が彼をおそった。

次のしゅん間、三吉には心の中になにかしらない、しかし変に河田師範というものと離るべからざるあるもの
が思い出されて来たような気がした。それは変な気持であった。

問六 次のしゅん間には彼は自分の思い当たったことで独りでに顔が赤くなった。

「にんにくだ、にんにくだ。」

にんにくをつるしたような伍子胥の眼。

これだ。」

三吉のその時の心の中には、そのどこで覚えたか知らない、しかも何の意味だかりよう解が出来ない川柳の記
おくと、またどこで見たのかはっきり覚えな^{〔注4〕}い支那^{〔注5〕}の水滸伝^{〔注6〕}の絵図の記おくとがよみがえって来て、当の河田
師範の風ぼうと三つどもえになってもみ合い、やがてこん然とゆう合されたのを感じたのであった。

「ほう見事なものだ。あれは蒙古^{〔注7〕}だよ。水滸伝だ。にんにくを……。」

このようにやや声高に三吉が言った時、その近所にこもっていた、笑いの爆発の用意が堤を切ったように解放
せられた。三吉の言葉は、そうなれば全部いってしまうのを要しなかったのである。

「蒙古、はっはははははは」

「水滸伝、はっはははははは」

問七a このような笑いのうず巻の中心に位して、三吉は我ながら顔が赤くなるのを覚えた。彼は、皆と一しょになっ
て笑えなかった、我ながら自分の言葉が効果が強く反きようしてしまったものだから。——彼の皆を笑わせた
欲望が、我ながら感心するような警句を生み、あまり見事に当たりをとってしまったものだから、彼は一種のき
まり悪さを感じたのであった。

問七b 彼は皆と一しょに笑えなかった。ただ「えへへへへへへ。」と笑ったのみだった。

式が済んでしまっから鳴りどよもしているその笑い。離れ離れにすわっていた生徒達の親しい者同志が顔
を見合わせた時、双方はこでもうれしそうな顔をした。

「変な顔だね。」言葉は省かれても両方の心は一致していた。

三吉は、やはりそんな一対が会おうやいなや冒頭^{〔注8〕}を省いて「にんにく、はははは。」とって笑い出すを見
て満足の頂点にいた。しかも彼らはだれがそんなうまいことをいったのか知らなかった。

三吉は、五年級の運動家で、日ごろ勢力をふるっている乱暴者が、赤んぼうのように楽しそうにしてそのあだ
名の命名者におしげもなく大声で賛仰^{〔注9〕}の声を放っているのをぼろ覗いた時、「ここでも認められている。」という
気がしてうれしさが加わった。

問八 その男はその命名者が三吉であるとは知らない、それを三吉自身が何くわぬ顔をしている——その気持が彼に
は愉快であった。また三吉にはそんな勢力家に面と向かってほめられるよりは、そのようなよろこびの方がはる
かに自由なのであった。

にんにくをつるしたような伍子胥の眼。

問九a この狂句^{〔注10〕}か川柳かわからないものが三吉の記おくに留まったのは、いつごろかまたどこからかわらなかつ
た。しかしそれは彼の記おくの中にわけのわからないものとして変にわだかまっていたのであった。

問九b 彼にはその記おくが、河田師範の顔を見たしゅん間に、期せずしてかびの生えているような古い記おくのたい
積からうかび上がって、その疑問を氷解したことが何よりうれしかった。それは彼に靈感——そういうものの存

在を肯定せしめたほどであった。彼にはその解しゃくがもう疑うべからざるものに思えたのであった。——
彼はいい気持になってその解しゃくが成り立った段階を分せきしていた。

それによると、彼が河田師範を見たしゅん間に連想したものは、これもいつ見たか、どこで見たか知れない水滸伝の絵であった。その中に活やくしている豪傑の姿であった。それはことにまなじりがさけてそのはしが上の方へつるし上がっている所で、河田師範の容ぼうと一致していた。——それが彼自身の解しゃくでは蒙古人種の特ちょうなのであった。

そしてその連想にびったりと合うべく伍子胥なる人物——それはもう水滸伝の豪傑にちがいないと彼には思えた——その伍子胥のにんにくをつるしたような眼が、その不可解のままでしかも変に忘れがたく、意識の底にこびりついていたその狂句の記おくから、ぼ、っ、かり、とうかび上がって来たのであった。

そしてそれらが三つどもえになってもみ合い、やがてこん然とゆう合されたのであった。

にんにくをつるしたような河田の眼。

彼はこの新しい狂句を得てとほうもなく有頂天になってしまった。

しかし三吉自身はそのにんにくというものすらもさだかには知っていないのであった。

しかしそれが支那人のたしなむ、ねぎのような臭気を多量にもっているもの、ら、っ、き、ょ、うのような形をしたもの、薬種屋の店先につるされているもの、とばく然と覚えていた。しかしその知識をどこから得たか、また彼が一度でもそれを見、それをかいだか、また一度でも確かに薬種屋の軒でそれを見たかということにはどれにも確実な記おくを持たなかった。

そうなれば彼の解しゃくもあいまいなものなのであったが、彼はかえってそれが一種の靈感のように思えたのであった。

にんにくをもてはやしている生徒達も、そんなことにはとん着がなかった。

しかしそのにんにくという言葉の音、そのいやしく舌にこびるような音を彼らが舌の上で味わって見て、次にそれを河田師範の風ぼうの上におっかぶせる時、彼らはとつ然うれしそうに笑い出すのであった。——少なくとも三吉の友達の比野という生徒の意見はそうであった。彼はやはりそのにんにく、なる言葉はきいたことがあるが、博物学的の知識を欠いていた一人であった。

三吉が比野からその意見をきいた時、三吉は例の由来の委細を、その根きよのあいまいなものにも気付かず、得意になって銜学的な口吻で語ってきかせたのであった。

しかしそれでもにんにくには陰な力があって人人の口から口へ伝わってゆく。——この想像は三吉に気持のいいものであったし、それは事実でもあった。三吉はその証を新しく目げきするたびに彼がひとかどの諷刺家になりすました気持であった。

群がっているコイに一片の麩を投げあたえた。コイの群にたちまち異常な喧轟が起こされる。——彼はそのように想像するのがうれしかった。そして一切が彼に味方しているように感じていた。

しかし彼のその得意にはだんだん暗い陰がさしていった。そして彼をあまやかし、彼をおだて、彼に与していた一切のものが彼を裏切り、彼に敵意を持っていると思わねばならない時がだんだんやって来た。

ある日彼らの級の柔道の時間が来たとき、その河田師範は、柔道の選手の一人を相手として寝業の教授をした。師範がいろいろ説明してきかせたなかに生徒には何だかさっぱりわからないことがあった。それはチャンスという言葉なのであったが、師範がその選手の首を片手で扼して、残りの手で相手のうでの逆をとるという業を示

した時師範はその機会という英語を使って、「こうすればチャンスだ。」といって皆の顔をうかがったのである。ある者はそれが耳の聞きちがいだろうとも思わず聞き流していた。またある者は機会がどうしたのだといふかしんでいた。

問二

しかし中にそれを意地悪く聞きとがめた者がいた。その男が近所の者に、「先生、玉つきとまちがってるぜ。」といった。その男の話によると玉つきでは両天びんの玉をチャンスというので、それは彼の説によるとチャンスの意味を取りちがえた玉つきの通用語なのであった。

「将棋ぎのように王手飛車とでもいえばいいのに生意気に英語を使ったりするからはじをかくんだ。」といったその男はあざけた。

それが口火になって級の者が「ハハハ、チャンスか。」といってうち興じていた時、三吉にはそのチャンスというあだ名がやがて彼の命名したあだ名を庄とうするのではないかというけねんが生じた。彼はそれが心配であった。

問九

その気持を彼は前から経験していた。それはその柔道師範に他のだれかが新しいあだ名をつけた時に感ずる、自分のあだ名の権威いに対こうしようとする者に対するにくしみやしつとの感じであった。この時にも彼はそれを感じたのであったが、そのあだ名の由来を説明してきかせた男の、——その男は級の中のしゃれ者であったが——それをいう時の柔道師範に対する悪意であった。「知らないくせに、生意気に英語を使うからはじをかくんだ」その言葉がもたらす河田師範に対する毒毒しいぶじょくを感じた。それは彼があだ名の対こう者と彼をにくむ感情と共に起こって来たのかも知れなかったが、彼は明らかにその男をにくむべき男だと思ったのであった。

問十

しかし次のしゅん間には、それと同様のこうげきが彼自身に加えられなければならないかった。

彼は自分の顔が独りでにあかくなるのを覚えた。

ことに彼は彼の無意識に働いていた意志というものが、河田師範の容ぼうを露骨ろこつに揶揄やゆしたものであると思つた時、自分がいかに非紳士しんし的な男であったかと思つた。

次にはその報いが、——自分こそ、河田師範からにくまれねばならない人間なのだ——という考えがうかんだ。彼の心はざんげの気持では止まっていなかった。さらに先生に対する恐怖きょうふに移って行つたのであった。

問十一

さらにまたそのざんげの気持は□の状態に——なぜ自分はこんなに軽はくな男なのであるか。なぜ軽はくにも、あの時、自分に、我こそそのあだ名の命名者にならなければならないという気持になったのであるか。

彼はその考えに責められた。ことに最も身ぶるいするほどたまらなかったのは、その時の自分の学学的な態度、——ことに救われないように思えたのは、それが銜学でも何でもない自分の軽率な早合点ではあるまいかという考えが彼をさす時であった。

しかし一方では彼の気持とは、まるっきり無関心に彼のあだ名がひろがってゆきつつあった。——と彼には思えた。彼はその考えをひがみだと思いたかつたのであったが、それが事実である証しんが意地悪く彼の目にふれた。ある日の正午の休けい時間であった。

冬の寒さにもめげず、運動場には活気がみなぎっていた。蹴球しゅうきゅうに使われる、まるいボールやゆがんだボールがつぎつぎにけり上げられた。そして生徒達は、運動場にはびこっているゴムマリの野球の陣じんをぬいながら争ってそれを取ろうとひしめいていた。また一方には鉄弾てつだんを投げている一群があった。

三吉は運動が出来ない少年であったが、やはりそんな生徒は一団を造って毎日申し合わせたように風のふかないかげにより合って雑談にふけるのであった。——

その日も三吉はその群の中にいた。そして話に耳を傾けながらも、運動場にもみ合っている生徒達をながめていた。

その時彼は柔道のけいこ着をつけた偉大な体格の男が、鉄弾を投げる生徒の中にまざっているのを見つけた。それは疑いもなく河田師範であった。その近所には河田師範が投げるのを見るために人だかりがしていた。雑談をしていた仲間もそれを見つけると、それを見るためにかけ出して行った。

そしてそこには三吉と、平田と、も一人絵のうまい比野という生徒の三人が残っていた。しかし彼にはそこでその三人がいるということに何か気まずい思いがあった。しかし彼はそこにいた。

三吉は、だんだん師範にあだ名をつけたことが苦い悔いとなっていた。そして多少のはばかりが師範に感ぜられていたものであるから、そこへかけてゆく気にはなれなかった。――

鉄弾が、その近くに見物している生徒らの頭より高くあがって、おちるとその一群からはく手や、感たんの声がきこえた。三吉らが話を止めてその方に目をやった時、何を思ったか、その絵の得意な比野という男が、大きな声で、「にんにく」とどなった。

三吉は面食らわざるを得なかった。真顔になって「おいよせよ。」と言ったが、比野はそれをどなると、三吉のかげへ身をかくして、また、「にんにく。」とどなった。

鉄弾の方の一群の中の数人が三吉らの方をながめた。それを見ると三吉は、はらはらした。近所にいたものも、両方を見くらべて笑っていた。その視線が三吉には、彼自身の困きやくしているのをおもしろがって見ているように思われた。

ことにそんなに無鉄ぼうにどなった比野に対しては、「ここに、先生のあだ名をつけた男がいますよ。」と河田師範に知らせる悪意さえ感じた。

三吉は先生に知られるのをおそれていた。またそれをおそれていることが人人にわかるのをおそれていた。それを知ったら人人は思いやりなく、いくじなしだというにきまっていると思われた。彼は人人にいくじなしのよに思われるのがいやであったので、ことに、その比野という男がそれを知ったら、何の容しゃもなくそれを種に三吉をおどすだろうと三吉は思っていた。そして比野はそういう方では評判の悪らつ性を持った男であった。三吉はその比野が悪魔のような眼で、ちゃんと自分のその恐怖を見ぬいて、こんなことをするのじゃないかと邪推する気持もあった。

問十二

三吉には「よせよ」という言葉さえ、もう自由には出なかった。彼はそれとなく師範のいる方へ背を向けた。

比野ももう満足したらしくどならなかった。しかし彼はさらに手痛い手術を三吉に試みた。

「津田もなかなか傑作を作るね。にんにく、とはうまくつけたな。」

彼が以前の彼なら、その賛辞を快く受け入れたであろうが彼にはもうそれが彼の傷口へあらあらしくふれるのであった。

(梶井基次郎「大蒜」)

〈注1〉学問や技芸を教える人

〈注2〉長さの単位。一尺は約三十センチメートル

〈注3〉中国、春秋時代の呉の名臣

〈注4〉中国の旧称。今は使わない

〈注5〉中国の長編小説

〈注6〉こっけいさをねらった句

〈注7〉学問・知識があることをひけらかすさま

〈注8〉口ぶり、話しぶり

〈注9〉にぎりしめ、おさえつける

〈注10〉からかう

〈注11〉砲丸^{ほうがん}投げの弾

問一 部a・bの意味として正しいものを選びなさい。

a わだかまる

1 落ちて広がる

2 散らばってしずむ

3 たまってとどまる

4 うかんでただよう

b ひとかど

1 大人びていること

2 一人前であること

3 専門的であること

4 人気があること

問二 部ア・イの使い方として正しいものをそれぞれ選びなさい。

ア 期せずして

1 学級会では私とAさんが期せずして同じ意見を発表した

2 Bさんは自分で注文した本がやっと届いて期せずしてよろこんだ

3 野球大会で最強といわれつづけていたチームが期せずして優勝した

4 つぼみをふくらませていた花が期せずしてさきはじめた

イ 聞きとがめる

1 父は、部屋の片づけが終わったと弟が言ったのを聞きとがめて庭のそうじをたのんだ

2 階下にいる兄は、二階で私が聞いている音楽を聞きとがめて曲名を当てた

3 母は、私が勉強の進み具合についていい加減な返事をしたのを聞きとがめてしかった

4 祖父は、表通りの車のそう音をびん感に聞きとがめていつもうんざりしている

問三 「三吉」の年れいが推測できる部分を十五字以内でぬき出しなさい。

問四 「いよいよ河田師範の顔がそれらの眼の矢面に立ったしゅん間、生徒達はみな急にうれしくなった」

(部A)「いよいよ公然と生徒の前に現れる段になった時、彼らは用意をしていたようにうれしそうな眼付きをしたのである」(部B)とありますが、このときの「生徒達」のうれしさはどのようなことに対するものですか。

1 たくましい河田師範の豪傑笑いを直接聞ける機会がとうとうやってきたこと

2 笑いを爆発させるための材料となる新任教師が今まさに目の前に現れたこと

3 校長のかた苦しいあいさつから解放されてようやく気楽なふん囲気になったこと

4 自分達のいたずらを大目に見てくれそうな新任教師がやっと着任したこと

問五 部「何かをきっ、か、けに爆発したい」とありますが、「何か」とは具体的にどのようなことですか。十五字以内でぬき出しなさい。

問六 部「次のしゅん間には彼は自分の思い当たったことで独りでに顔が赤くなった」とありますが、このときの「三吉」の状態を表すものとしてふさわしいものを選びなさい。

1 気をもんでいる

2 気がせいっている

3 気持がゆれている

4 気持が高ぶっている

問七 「彼は、皆と一しょになって笑えなかった」(――部a)「彼は皆と一しょに笑えなかった」(――部b)とありますが、同じ内容をくり返すことでどのような効果をあげていますか。

1 河田師範に「にんにく」というあだ名をつけたことが、あとで三吉の心に暗いかげを落とすことを暗示する効果

2 発言者自身の笑い声で場をしらけさせないように、三吉が無理に笑いをこらえていることを明らかにする効果

3 河田師範があだ名の命名者に報復するのではないかという心配が、三吉の心に芽生え始めていることを強調する効果

4 自分の言葉がさえぎられ最後まで言い切ることができなかったことに、三吉が不満を覚えていることを印象づける効果

問八 「三吉」にとって「そのようなよろこびの方がはるかに自由なのであった」(――部)のはなぜですか。

1 自分の知識や才能をかくすことなく表に出すことができ、大きな満足感にひたれるから

2 命名者としての責任にしばらくはたれることなく、あちこちでわき上がる賞賛を存分に味わえるから

3 あだ名をつけたのが三吉だとは知らずにおもしろがっている勢力家を、こっそりあざわらせるから

4 三吉が命名者であることをかくすことで乱暴者たちに目をつけられるおそれが消え、気楽になれるから

問九 ――部「彼はそれが心配であった」とありますが、「それ」とはどのようなことですか。本文中の言葉を用いて四十字以内で書きなさい。

問十 ――部「しかし次のしゅん間には、それと同様のこうげきが彼自身に加えられなければならなかった。彼は自分の顔が独りでにあかくなるのを覚えた」について答えなさい。

彼は自分の顔が独りでにあかくなるのを覚えた」について答えなさい。

① 「それと同様のこうげき」とありますが、「それ」とはどのようなものですか。

1 自分よりはるかに優れた才能を持つその男に対するねたみ

2 悪意やぶべつに満ちた悪口を言うその男に対するにくしみ

3 年長者に向かって生意気なことを言うその男に対する軽べつ

4 実力もないのにえらそうにふるまうその男に対するいらだち

② 「彼は自分の顔が独りでにあかくなるのを覚えた」とありますが、このときの「三吉」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 その男に敗北してくやしく思っている

2 その男の態度にいきどおりを覚えている

3 自分のライバルがあらわれて興奮している

4 自分の過ちに気づいてはずかしく思っている

問十一 ☐に入るものを選びなさい。

1 暗中模索 さく

2 疑心暗鬼 き

3 自己嫌悪 けんお

4 自暴自棄 き

問十二 — 部「三吉には『よせよ』という言葉さえ、もう自由には出なかった。彼はそれとなく師範のいる方へ背を向けた」とありますが、このときの「三吉」の説明としてふさわしいものを選びなさい。

1 運動場にいる皆からいくじなしだといわんばかりの視線を浴びせられるので、せめて河田師範とだけは目を合わせないようにして、これ以上みじめにならないようにしている

2 比野が腹黒い人間であることを今さらながら思い出し、不本意ながら比野の仲間に組み入れられてしまったことを認め、自分の中に芽生え始めていた河田師範への謝罪の気持ちを捨てようとしている

3 比野を刺激してさらにあだ名をさげられたり自分の本心があらわになったりしかねない事態にきわめてきん張し、河田師範や人人の自分への関心をしゃ断して、にげ出したいくなっている

4 もとはと言えすべて自分の発言が原因であることを思うと比野を責めることもできず、ひたすら自分のおろかさや軽率さばかりが思われるので、静かに人人のいかりや非難を受け止めようとしている

問十三 この作品で、「三吉」とよび呼ぶ「恐怖」とはどのようなものですか。文章全体をふまえて、ふさわしいものには○、そうでないものには×を書きなさい。

1 先生にあだ名をつけたことが明らかに学校からばつを受けることへの恐怖

2 容ぼうをからかうあだ名をつけるような軽はくなくことをして河田師範からにくまれることへの恐怖

3 皆から自分がいくじなしであると言われてしまうことへの恐怖

4 河田師範に新しいあだ名がつくことで自分のつけたあだ名が否定されてしまうことへの恐怖

5 河田師範に悪意を持っていた男が、いつか自分をもぶじょくする日が来ることへの恐怖

6 先生のあだ名をつけたのが自分であることを当の先生に知られてしまうことへの恐怖

「二」次の文章を読んで後の問に答えなさい。

世に有名なイギリス、ロンドンはウエストエンドのベーカー通り二二一番地に居を構えるシャーロック・ホームズという私立探偵はどんな難事件でも解決してしまう変な男です。

「金色の鼻眼鏡」という事件では、ある老学者の論文の口述筆記をするためにやとわれた優秀な青年が何者かに殺されてしまいます。首筋をさされ、血まみれになって死ぬのです。手には不思議な眼鏡、女物の金色の鼻眼鏡がしっかりとにぎられていました。しかも、その眼鏡はものすごく度が強く、それがなくてはとても、日常生活が出来そうにありません。そう查が進むにつれ、青年には恋人がいて、その恋人と激しいけんかをしていたことがわかります。

問一 A、その恋人は鼻眼鏡をかけています。さっそく警察へ引っ張られますが、その眼鏡はかざりみたいなので、たいした度ではありませんでした。どうもちがうようです。老学者は病気で、一日ベッドで暮らしています。庭に出ることもありますが、車いすを使わなければならず、それも召使がかかえ上げて乗せてやらなければなりません。とても、犯罪を起こせる状態ではありません。老学者の部屋に何か犯人がねらうような高価なものがあるのかと、警察もホームズも考えますが何もありません。警察は頭をかかえてしまいます。ホームズは考え続けます。ホームズの頭は、それがないと日常生活が出来ないくらい強い近眼、老学者の机の引き出しのかぎ穴のまわりに乱雑につけられたきず、老学者のベッド付近で見つけた婦人のもらしいくつあと、という三つの事実をひとつにまとめようとさかんに回転します。どうも、老学者がくさいのです。が、彼のまわりに女性のかけはありません。

ホームズは必然的な結論にたどりつきます。このひどい近眼の殺人者は街へはにげようがない。なぜなら、まわりがよく見えないからたちまちつかまってしまはずだ。

問一 B、犯人は老教授の家の中のどこかにひそんでいるにちがいない、という結論です。可能性は老教授の部屋しかありません。そして、確かに犯人はそこにかく

まわっていたのです。

問二

ミステリーは殺人犯という形でわからない部分をまず教えてくれます。そのわからない部分を、少しずつわかるようにしてくれるのがミステリーです。

ミステリーの面白さは話の中に作者がわざとちりばめた手がかりらしいものの中から、どれが本当の手がかりかを見つけて出すことにあります。その手がかりがあれば話がひとつにまとまってしまふ、という手がかりです。「金色の鼻眼鏡」の場合は、登場する人物のだれもが犯人でなく、実は犯人はそれまでは一度も登場しなかった人物という設定です。しかも、その人物の存在は度の強い婦人用眼鏡の持ち主、ということから最初から暗示されていたのです。

このようにミステリーではわからない部分は犯人探しという形で準備されていますが、現実生活ではそうはゆきません。犯人は準備されていないのです。犯人、つまりわからない部分は自分で発見しなければなりません。ですが、わからない問題を発見した後は、その解決方法はミステリーの犯人探しと似ています。自分の手持ちの材料から、犯人探しをやるのです。

問三

学校ではわからないことは試験問題とか、先生からの質問という形であたえられます。ですが、このように受け身の形で人からあたえられた問題（わからないこと）が解けたからといって、知識が自分のものになるわけはありません。本当の意味でのわかる・わからないの区別の能力は人からあたえられるものではありません。自分から自発的にわからないことをはっきりさせ、それを自分で解決してゆかないかぎり、自分の能力にはならないのです。

筆者の引用はいつも古すぎて申し訳ありませんが、「十で神童、十五で秀才、二十過ぎればただの人」という言葉があります（まちがっていたらごめんなさい）。学校で試験が出来たからといっても、それはあたえられた

ことをこなしているだけで、その人の能力の尺度にはなりません。社会に出た時、なんやあいつ、と無能をさらすことになります。社会で生きてゆくには自分で自分のわからないところをはっきりさせ、自分でそれを解決してゆく力が必要です。

人間は生物です。生物の特ちょうは生きることです。それも自分で生きぬくことです。知識も同じで、よくわかるためには自分でわかる必要があります。自分でわからないところを見つけ、自分でわかるようにならなければなりません。自発性という色がつかないと、わかっているように見えても、借り物にすぎません。実地の役に立たないことが多いのです。

（山鳥重『「わかる」とはどういうことか——認識の脳科学』）

問一 ☐ 部 A・B にあてはまるものをそれぞれ選びなさい。

1 だから 2 あるいは 3 ところが 4 しかも 5 ところで

問二 ☐ 部「ミステリーは殺人犯という形でわからない部分をまず教えてくれます」とありますが、現実生活においてまずやらなければならないことは何ですか。文章中の言葉を用いて二十字以内で書きなさい。

問三 ☐ 部「自分の手持ちの材料から、犯人探しをやる」とはどのようなことですか。文章中の言葉を用いて三十字以内で書きなさい。

問四 ☐ 部の内容を、六十字以内で要約しなさい。

問五 「わからないこと」があつてそれがおもしろいと感じたあなたの体験を、どのようにおもしろかったかわかるように百八十字以内で書きなさい。

「三」 次の各文は、どれも表現が適切ではありません。適切でない理由をそれぞれ後から選びなさい。

- ア 私の実力ではとうていAに負けるだろう。
イ 今日はすごい寒いからぶ厚いコートが必要だ。
ウ その店員はそっと近づいてきた人に声をかけた。
エ 私の夢は建築家になって立派な家を建てたいと思っている。

(理由)

- 1 主語と述語が正しく対応していない
- 2 修飾語の形が修飾される語に正しく対応していない
- 3 修飾語がどこにかかっているかがはっきりしない
- 4 うち消しの表現を必要とする修飾語がうち消しがないのに用いられている

「四」 次の――部1～5のカタカナの部分を漢字で書きなさい。また――部6～8の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

- | | | | |
|-------------|---------------|------------|----------|
| 1 ジョレツをさだめる | 2 運動会のショウシュウ係 | 3 リャクレキを書く | 4 王にツカえる |
| 5 ほめられてテれる | 6 茶わんに盛る | 7 刻む | 8 潮流 |

(問題は以上です。)

*問題文に使用した作品における難しい漢字表記は、現在一ぱんに使われている漢字またはひらがなに改めるか、読みがなをほどこすかしてあります。また、送りがなを加えたり取ったりしたものもあります。

